

仏説観無量寿經 法事用

ぶっせつかんむりようじゅきょう

○は調声(リーダー)が読む。●より一緒に読む。

合掌・礼拝・経本を頂く キン二打

三奉請

ぶじょうみ だ によらいにうどうじょう さんげらく

○奉請弥陀如來入道場●散華樂

「一」「一」「一」「一」「一」「一」「一」「一」

阿弥陀如來、法要の準備が整いました。花を降らしお迎えします。

○奉請釈迦如來入道場●散華樂

「一」「一」「一」「一」「一」「一」「一」「一」

釈迦如來、法要の準備が整いました。花を降らしお迎えします。

○奉請十方如來入道場●散華樂

「一」「一」「一」「一」「一」「一」「一」「一」

十方如來、法要の準備が整いました。花を降らしお迎えします。

キン一打 作相 キン二打 表白 キン一打

全ての仏方、法要の準備が整いました。花を降らしお迎えします。

キン一打 作相 キン二打 表白 キン一打

○仏説觀無量寿經

宋元嘉中畠良耶舎記

宗の時代(五世紀前半)に畠良耶舎が建康(南京)にて訳す

序分 証信序

・・・お經の内容を證明する

●如是我聞。

私は一のよう^に聞きました。

序分 発起序 化前序

・・・お釈迦^様が待機^{されて}いる場所を説明する

一時仏在王舎城・耆闍崛^山中・与大比丘衆・千二百五十人俱・菩薩三万二千・文殊師利法王子・

ある時、お釈迦^様がマガダ国首都王舎城の近くの耆闍崛^山におられ、一二五〇人の弟子たちとおられました。

而為上首。

また、文殊菩薩をはじめとして、三万二千人の菩薩もおられました。

序分 発起序 禁父縁

・・・王舎城で王子が父頻婆娑羅を幽閉する

爾時王舎大城・有一太子・名阿闍世・隨順調達・惡友之教・收執父王・頻婆娑羅・幽閉置於・七重

その時、王舍城には阿闍世という王子がいました。悪友の提婆達多にそそのかされ、父の頻婆娑羅王を捕らえ、七重に囲われた牢獄に閉じ込めました。

室内・制諸群臣・一不得往・国大夫人・名韋提希・恭敬大王・澡浴清淨・以酥蜜和麩・用塗其

家臣に命じ、誰も王に会うことを許しませんでした。妃の韋提希夫人は、王の身を案じ、自分の身体を洗い清め、

小麦粉に蜂蜜や牛乳を発酵させたものを練り混ぜて、自らの身体に塗り、

身・諸瓔珞中・盛蒲桃漿・密以上王・爾時大王・食麩飲漿・求水漱口・漱口畢已・合掌恭敬・

胸飾りには、どうの汁を入れ、密かに王のもとに行き、それらを差し上げました。王は食し、水で口を濯いでから、

向耆闍崛山・遙礼世尊・而作是言・大目犍連・是吾親友・願興慈悲・授我八戒・時目犍連・

耆闍崛山の方を向き合掌し、お釈迦様に礼拝をして言いました。「目連尊者は我が親友です。どうかお慈悲によつ

て、私に八斎戒をお授けになり、一日一日を安らかに過ごせるようにしてください。」その時、目連尊者は

如鷹隼飛・疾至王所・日日如是・授王八戒・世尊亦遣・尊者富一樓那・為王說法・如是時間・經

鷹や隼が飛んできたかのようすぐに王のもとに現れました。そして、毎日毎日八斎戒を授けました。また、お

釈迦様は說法一番の富樓那尊者を遣わして、王の為に仏法を説かせました。

三七日・王食麿蜜・得聞法故・顏色和悅・
さんしちにち おうじきしうみつ どくもんぼう こ げんしきわえつ

三週間が過ぎ、王は食事もでき、仏法を聞くことができたので生き生きとし悦びに満ち溢れていました。

序分 発起序 禁母縁・母韋提希が軟禁される

時阿闍世・問守門者・父王今者・猶存在耶・時守門人・白言大王・國大夫・身塗麪蜜・瓔珞盛漿
じあじやせ もんしゆもんしや ぶ おうこんじや ゆぞんざいや じしゆもんにん びやくこんだいおう こくたいぶにん しんすしょうみつ ようらくしょうしょう

可闇世三

阿闍世王は門番に聞きました。「父はまだ生きているのか?」門番は答えました。「韋提希様が密かに食へ物を与えてようじょうおうしゃもんもくれんきゆうふるなじゆうくにらいいおうせっぽうふかさんせいじあじやせもんしごぬごもわつ持用上王・沙門目連・及富樓那・從空而來・為王說法・不可禁制・時阿闍世・聞此語已・怒其母曰

・我母是賊・与賊為伴・沙門惡人・幻惑呪術・令此惡王・多日不死・即執利劍・欲害其母・時有一
が も せぞく よぞく いはん しゃもんあくにん げんなくしゅじゆつ りふう し あくおう たに ちふし そくしゅりけん よくがいご も じ う いっ

賊の味方をする尊者達も悪人である。幻惑の呪術を用いて父を何日も生かしておくとは。」阿闍世王は剣を取

り、母を殺そうとしました。その時、聰明で知識がある

臣・名曰月光・聰明多智・及与耆婆・為王作礼・白言大王・臣聞毘陀論經説・劫初已來・有諸惡
月光といふ大臣が耆婆大臣と共に阿闍世王に礼をしてから言いました。「王様、私共の知るところによりますと、
がつこう
さばだいじん
あじやせおう

古より多くの悪王が生まれ、王位を乗つ取ろうと父を殺害した者は

一万八千人に及びます。しかし、未だ母を殺した者は聞いたことがありません。今、王様が母君を殺めるというのであれば、大変な汚れとなりましよう。聞くに堪えません。人間のすることではありません。

忍聞・是梅陀羅・不宜住此・時二大臣・説此語竟・以手按劍・却行而退・時阿闍世・驚怖惶懼・告

もはや二にいることはできません。」大臣達は、剣に手を添えながら、ジリジリと後ずさりをしました。阿闍世王

は驚いて耆婆大臣に言いました。

耆婆言・汝不為我耶・耆婆白言大王・慎莫害母・王聞此語・懺悔求救・即便捨劍・止不害母・勅語

「お前は私の母とを離れるのか」耆婆大臣は答えました。『王様、どうか母君だけは手をかけないでください。』

れを聞いた阿闍世王は懺悔し、剣を捨て、思いどまりました。

内官・閉置深宮・不令復出・

そして、家臣に命じ、王宮の奥深くに閉じ込め、外へ出ることができないようにしました。

序分 発起序 禅苦縁・・・韋提希の母とにお釈迦様が訪れる

時 章提希・被幽閉已・愁憂憔悴・遙向耆闍崛山・為仏作礼・而作是言・如來世尊・在昔之時・

6

こうして幽閉された章提希夫人は、悲しみや焦りのあまり疲れ果てていました。遙か遠くの耆闍崛山の方を向

き、お釈迦様に礼拝し申し上げました。「お釈迦様、昔から

こうけんあなん らいもんが がこんしゅうう せそん いじゆう むゆ とつけん がんけんもくれん そんじやあなん よがそうけん
恒遣阿難・來慰問我・我今愁憂・世尊威重・無由得見・願遣目連・尊者阿難・与我相見・

よく阿難尊者をお遣わしになり私を慰めてくださいましたが、今、私は深く落ち込んでいます。お釈迦様をお呼びすることは畏れ多いので、目連尊者と阿難尊者をお遣わしください。」

作是語已・悲泣雨涙・遙向仏礼・未拳頭頃・爾時世尊・在耆闍崛山・知章提希・心之所念・即勅

韋提希夫人が雨のように涙を流しながら、お釈迦様の方を向き礼拝をしました。すると、頭を上げないうちに、

耆闍崛山におられたお釈迦様がその心を知り、すぐに

大目犍連・及以阿難・從空而來・仏從耆闍崛山沒・於王宮出・時章提希・礼已拳頭・見世尊・釈一

目連尊者と阿難尊者を遣わし、自身も耆闍崛山から王宮においてになりました。韋提希夫人が頭を上げると、

そこにはお釈迦様がおられました。お体は金色に光り輝き、宝玉の蓮華にお座りになられ、左に目連尊者を、右

あなたそんじや

たいしゃくとん ほんとん してんのう

に阿難尊者をお従えになられました。帝釈天や梵天や四天王達は空中におられ、花を降らして
持用供養・時韋提希・見仏世尊・自絶瓔珞・拳身投地・号泣向仏・白言世尊・我宿何罪・生此
くよう いたいけぶん しゃか しゃか しゃか しゃか しゃか しゃか しゃか しゃか

供養をなさいました。韋提希夫人はお釈迦様を見ると、自ら飾り物を捨て、手足を地につけ、泣きながらお釈迦
様に申し上げました。「お釈迦様、私は一体何の罪があつて

あくし せそんぶう がどういんねん よだいはだつた くい けんぞく

悪子・世尊復有・何等因縁・与提婆達多・共為眷屬・

このような悪い子を産んだのでしょうか。お釈迦様もまた、何の因縁で提婆達多とご親戚なのでしょうか。

序分 発起序 欣淨縁・・・韋提希が極樂淨土を願う

この世は地獄・餓鬼・畜生のような
どうかお釈迦様、私の為に悩みのない世界を教えて下さい。私はその世界に生まれたい。この濁りの世を離れたいの
です。この世は地獄・餓鬼・畜生のような
まんたふせんじゆ がんがみらい ふもんあくしゆ ふけんあくにん こんこうせそん ごたいどうじ ぐあいさんげ ゆいがんぶつにち きようが
満・多不善聚・願我未來・不聞惡声・不見惡人・今向世尊・五体投地・求哀懺悔・唯願仏日・教我
りこくがき ちくしょようよ

罪を犯し、欲にまみれている者で満ち溢れています。私はもう二度とこれらの声を聞いたり姿を見たくありません
ん。今、お釈迦様に私の全てを持つて礼拝し、お慈悲を請います。

かんの しょうじょうこうしょ にじせん ほうみけんこう ここうこんじき へんじょうじっぽう むりようせかい げんじゅぶつちよう けいこんだい にま

觀於・清淨業處・爾時世尊・放眉間光・其光金色・徧照十方・無量世界・還住仏頂・化為金台・如

どうか清らかな世界をお見せください。」その時お釈迦様の眉間の白毫から金色の光が放たれました。すべての世界を照らし、お釈迦様の頭の上に戻り、金色の台と成りました。それは世界の中心にそびえる

しゆみせん じっぽうしょぶつ じょうみようこくど かいおちゅうげん わくう こくど じっぽうこうじよう ぶう こくど じゅんせれんげ ぶう こくど
須弥山・十方諸仏・淨妙國土・皆於中現・或有國土・七寶合成・復有國土・純是蓮華・復有國土・

しゆみせん

ほとけ

須弥山の様です。そこに、すべての清らかなみ仏の国々が現れました。七つの宝でできた国、蓮の花で満ちた国、如自在天宮・復有國土・如玻瓈鏡・十方國土・皆於中現・有如是等・無量諸仏國土・嚴頭可觀・

たけじさいてん

ほとけ

他化自在天の宮殿のよくな国、水晶の鏡のよくな国など様々です。み仏の国の美しさをお見せになつたのです。

りょういだいけんじいだいけ ひやくぶつごんせん せしょぶつど すいぶしょうじよう かいうちうこうみよ がこんぎょうしづう ごくらくせかい
令韋提希見・時韋提希・白仏言世尊・是諸仏土・雖復清淨・皆有光明・我今樂生・極樂世界・

いだいけぶにん

ほとけ

韋提希夫人は申し上げました。「お釈迦様、み仏の世界は清らかで光で満ちていますが、その中でも極樂世界の

あみだぶつしょ ゆいがんせそん きょうがしゆい きょうがしょうじき
阿弥陀仏所・唯願世尊・教我思惟・教我正受・

あみだぶつ

ごくらく

阿弥陀仏の所に生まれたい。どうか私に極樂世界を想う方法を教えて、お徳を受ける方法を教えて下さい。」

序分 發起序 散善頭行縁・・・極樂へ生まれる方法をおおまかに説く

しょふん

ほきしょ

さなせんげんきよう

にじせん そくべんみしょう うこしつこう じゅうぶくしゃつ いちいちこうしょう ひんばばしゃらちよう にじだいおう すいさいゆへい しんげんむ
爾時世尊・即便微笑・有五色光・從仏口出・一一光照・頻婆娑羅頂・爾時大王・雖在幽閉・心眼無

しゃか

ごしき

びんばしらおう

これを聞いたお釈迦様は微笑まれ、口から五色の光が放たれ、その一つ一つが頻婆娑羅王の頭を照らしました。そ

の時の大王は幽閉されていましたが、心の眼で
障・遙見世尊・頭面作礼・自然増進・成阿那含・爾時世尊・告章提希・汝今知不・阿弥陀仏・

遠くのお釈迦様を見ることができ、頭を地につけ礼拝しました。そして自ずと迷いの世には戻らない位に至つたので

す。その時、お釈迦様は韋提希夫人に仰せられました。「そなたは知つてゐるか。阿弥陀仏は

去此不遠・汝当繫念・諦観彼國・淨業成者・我今為汝・廣說衆譬・亦令未來世・一切凡夫・欲修淨

遠くにいるわけではない。そなたは心を集中して、極樂淨土の阿弥陀仏を心に映し出すのだ。私はそなたの為に、

その方法を説く。また、未来に清らかな行を願う者たちを

業者・得生西方・極樂國土・欲生彼國者・當修三福・一者孝養父母・奉事師長・慈心不殺・修

西方極樂淨土に生まれさせよう。極樂に生まれたい者は、三つの善い行いをするがよい。一つは、親孝行をし、師や

年上によく仕え、優しさを持つて生き物を殺さず、怒らず、盜らず、飲まずなどの十の善い行いを行うこと。

十善業・二者受持三帰・具足衆戒・不犯威儀・三者發菩提心・深信因果・誦誦大乘・勸進行者・

二つは仏法僧の三帰依をし、戒を守り、行いを正しくすること。三つは、悟りを求める心を起こし、因果を深く信

だいじょう きょうでん ほんのう ほんのう

じ、大乗の經典を読み、人々に勧める。煩惱盛んな者には難しいであろうが、
によしさんじ みょうじょうじゅうぶつこうじだいけ によこんちふ しさんじゅごう かこみらいげんさい さんせしょぶつ じよつこうじょがん
如^シ此^ニ三^事・名^為淨業[・]仏^告韋^提希[・]汝^今知^不・此^ニ三^種業[・]過^去未^來現^在・三^世諸^仏・淨業正^因・

「二、つを售キテ、」と言つた。焼けたうれしさは言つてしまつた。「そよぎは知つて、るが。二、つを售キテ、」は過去見在

三三

未来の私がたの正しい行いであり、み仏になる方法なのだ。達成することは困難である」「

卷之三

序分 発起序 定善示観縁・・・極楽淨土を見る方法を説く

仏告阿難・及韋提希・諦聽諦聽・善思念之・如來今者・為未來世・一切衆生・為煩惱賊・之所害
ふつごうあなん ぎゆういたいけ たへちようたへちよう せんしねんし よらいこんじや いみらいせ いつさいしゆじよう いほんのうぞく いしょがい

しやか
あなんそんじや
いだいけぶにん
うれいは可難尊者ニ事是希夫人ニ仰ナつし
ま
二二。」「うハリニ止ム慮ハて、ニレモ念ム。」
ほんのう
頑凶ニ

惱む未来のすべての者の為に清らかな行を説く。これらの行の難しきを知り、南無阿弥陀仏の念佛の素晴らしさを
しゃせつしょうじょうじゅせんざいいたいけけもんしじあなんによどうじゅじこういたしゅせんせつぶつこによらいこんじやきょういたい
者・説清淨業・善哉章提希・快問此事・阿難汝當受持・広為多衆・宣說仏語・如來今者・教章提

を知るがよい。善いぞ韋提希夫人、よく尋ねてくれた。阿難よ、私が説く教えを覚え、多くの者たちの為に広める
いだいけぶにん
あなん

い
だ
い
け
ぶ
に
ん

帝及未來世、一刀快生、観今西方、極樂世界、以ム力故、當得見彼、情爭因上、四丸用境、自
けざらみらいせいかざしあじようかんのさにほうじくふくせかいいつつりこどうとくくねんびじよじょうじくどによしゅうみよしうじようじ

西方極楽世界を觀れるようにしてよう。み仮の力で清らかな世界を見ることができるのだ。くもりのない鏡で自分

の姿を映し出すように。

極楽浄土の素晴らしい景色を見て、歓喜し、悟りを得るであろう。」お釈迦様は韋提希夫人に仰せられました。

「そなたは弱い人間だ。煩惱があり、すべてを見通す天眼通を得ていないから、

劣・未得天眼・不能遠観・諸仏如來・有異方便・今汝得見・時韋提希・白仏言世尊・如我今者・以

遠くを観ることができない。しかし、み仏は様々な手段を持つてゐるから、そなたは見えるようになる。」韋提希

夫人はお釈迦様に申し上げました。「お釈迦様、私は今、み仏のお力で

仏力故・見彼國土・若仏滅後・諸衆生等・濁惡不善・五苦所逼・云何當見・阿彌陀仏・極樂世界・

極樂淨土を見れました。しかし、あなた様がこの世を去られた後の人々は、悪い行いはしても善い行いはせずに苦しむでしょう。そうなればその者たちはどうやって阿彌陀仏の極楽浄土を見ることができるのでしょうか。」

キン二打

正宗分 定善 華座観

あみだぶつ

○ 仏告阿難・及韋提希・諦聽諦聽・善思念之・仏當為汝・分別解説・除苦惱法・汝等憶持・広為大

たたちの為に苦惱を除く方法を説く。そなた達はよく覚えて広く人々の為に

衆・分別解説・説是語時・無量寿仏・住立空中・觀世音・大勢至・是二大士・侍立左右・光明熾

「阿弥陀佛が空中でお立ちになられました。左には觀世音菩薩と大勢至菩薩が現れてゐるのだ。」こう言われた時、阿弥陀佛が空中でお立ちになられました。左には觀世音菩薩と大勢至菩薩が現れてゐるのだ。

薩が付き従つていました。光明はまばゆく、

盛・不可具見・百千閣浮擅金色・不得為比・時韋提希・見無量壽仏已・接足作禮・白仏言世尊・我

見ることができません。百千の金色も比べものになりません。韋提希夫人は阿弥陀仏を拝見し、お釈迦様の足に頭
こんじき
いたいけぶにん
あみだぶ
しゃか

をつけ礼拝らいはいをしました。そして韋提希夫人いだいけぶにんは申し上げました。「お釈迦様しゃか、私は

こんいんぶつりつ こ とっけんむりようじゅぶつ
今因仏力故・得見無量寿仏・及二菩薩・未來衆生・當云何觀・無量寿仏・及二菩薩・仏告韋提希・
ぎゅうにぼさつ みらいしゅじょうどううんがかん むりようじゅぶつ
ぎゅうにぼさつ ぶつごういだいけ

今、あなたのお力で阿弥陀仏と二人の菩薩を拝見することができました。未来の人々はどうやって見ることができます。

るのでしょうか。」お釈迦様は韋提希夫人に仰せになりました。

欲觀彼仙者·當起想念·於七寶地上·作蓮華想·令其蓮華·一一葉·作百寶色·有八万四千脈·

一枚百の宝の色で輝いてると想つがよい。また八万四千の筋があり、

ゆによてんえ みやくうはちまんしせんこう りょうりうふんみよう

かはりようどっけん けようしようしゃ しゅこうにひやくごじゅう ゆじゅん

によせれんげ

猶如天画・脈有八万四千光・了了分明・皆令得見・華葉小者・縱廣二百五十由旬・如是蓮華・

天の絵のようである。筋には八万四千の光があり、それらを一つ一つはつきりと見ることができるようにするのだ。

花びらは小さいものでも縦横二百五十由旬である。このよだな蓮華に

れんげ

有八万四千葉・一一葉間・各有百億・摩尼珠王・以為映飾・一一摩尼・放千光明・其光如蓋・七宝

八万四千の花びらがついている。花びらと花びらの間には百億の宝玉で飾られている。それぞれの宝玉が千の光を放つてゐる。その光は七つの宝でできた天蓋のように、

合成・偏覆地上・釈迦毘楞伽宝・以為其台・此蓮華台・八万金剛・甄叔迦宝・梵摩尼宝・妙真珠

地上をくまなく覆つてゐる。釈迦毘楞伽宝は蓮華の台となり、八万の金剛宝や甄叔迦宝や梵摩尼宝や真珠の網で

網・以為交飾・於其台上・自然而有・四柱宝幢・一一宝幢・如百千万億・須弥山・幢上宝幔・如夜

飾らでいる。その台の上に四本の宝柱がある。それぞれ百千万億の須弥山を重ねたように高い。その上の宝の幕は

まてんぐ うこひやくおく みみようほうしゅ いよいよじき いちいちほうしゅ うはちまんしせんこう いちいちこう さはちまんしせん いしゃ

「無量寿仏を拝見したい者は、これらを思い描くがよい。七つの宝の大地の上に、蓮華を想い浮かべ、花びらが一枚一枚百の宝の色で輝いてると想つがよい。また八万四千の筋があり、猶如天画・脈有八万四千光・了了分明・皆令得見・華葉小者・縱廣二百五十由旬・如是蓮華・天の絵のようである。筋には八万四千の光があり、それらを一つ一つはつきりと見ることができるようにするのだ。花びらは小さいものでも縦横二百五十由旬である。このよだな蓮華に有八万四千葉・一一葉間・各有百億・摩尼珠王・以為映飾・一一摩尼・放千光明・其光如蓋・七宝八万四千の花びらがついている。花びらと花びらの間には百億の宝玉で飾られている。それぞれの宝玉が千の光を放つてゐる。その光は七つの宝でできた天蓋のように、合成・偏覆地上・釈迦毘楞伽宝・以為其台・此蓮華台・八万金剛・甄叔迦宝・梵摩尼宝・妙真珠地上をくまなく覆つてゐる。釈迦毘楞伽宝は蓮華の台となり、八万の金剛宝や甄叔迦宝や梵摩尼宝や真珠の網で網・以為交飾・於其台上・自然而有・四柱宝幢・一一宝幢・如百千万億・須弥山・幢上宝幔・如夜飾らでいる。その台の上に四本の宝柱がある。それぞれ百千万億の須弥山を重ねたように高い。その上の宝の幕は

夜魔天のようだ。五百億の素晴らしい宝玉で飾られている。それぞれの宝玉は八万四千の光を放ち、それぞれの金色は八万四千の違う金色に輝いている。それぞれの金色は宝の大地に満ち、いたるところで様々な姿となる。金剛の台となつたり、あるいは真珠の網となり、あるいは様々な花の雲となる。あらゆる方向において、

面・随意变现・施作仏事・是為華座想・名第七觀・仏告阿難・如此妙華・是本法藏比丘・願力所

思いのままに変化しみ仏のはたらきを表す。これを華座想といい第七の觀と名付ける。「お釈迦様は阿難尊者に仰せられました。「これらの花は、法藏菩薩の願力により出来上がったのだ。

成・若欲念彼仏者・當先作此華座想・作此想時・不得雜觀・皆應一一觀之・一一葉・一一珠・

もし、阿弥陀仏を想い描きたいと願うならば、まず、この華座想をしなさい。これをするときには、雜に行つてはならない。皆一つ一つ丁寧に観ていかねばならない。一つ一つの花びら、一つ一つの宝玉、

一一光・一一台・一一幢・皆令分明・如於鏡中・自見面像・此想成者・滅除五万劫・生死之罪・

一つ一つの光、一つ一つの台座、一つ一つの柱を丁寧に描いて、鏡に自分の姿が映し出されたようにはつきりと想い描

かねばならない。これができれば、五万劫の迷いの罪が消え、

必定当生・極樂世界・作是觀者・名為正觀・若他觀者・名為邪觀・

必ず極樂淨土に生まれることが出来る。この觀を正觀といい、できなければ邪觀という。」

正宗分 定善 像觀・・・阿彌陀仏の像を想う

お釈迦様は阿難尊者と韋提希夫人に仰せられました。これが終われば、次にみ仏を想い描きなさい。何故なら、
あらゆるみ仏は自在に動き姿を変える。すべての人々の心にも表れよう。

中・是故汝等・心想仏時・是心即是・三十二相・八十隨形好・是心作仏・是心是仏・諸仏正徧知

だから、そなたが心にみ仏を想う時、その心はみ仏の特長である三十二相と八十隨形好であり、その心はみ
仏となり、その心はみ仏である。み仏の海のように深い智慧で表れてくださる。

海・從心想生・是故應當・一心繫念・諦觀彼仏・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀・想彼仏者・先

だから集中して阿彌陀仏をはつきりと想い描くのだ。阿彌陀仏を想い描くには、

どうぞうぞう へいもくかいもく けんいちほうぞう によえんぶ だんごんじき ざ ひ けじよう けんぞうざい しんげんとっかい りょうりょうふんみよう けんこくのつ
当想像・閉目開目・見一宝像・如閻浮擅金色・坐彼華上・見像坐已・心眼得開・了了分明・見極樂
まず像を想い描くのだ。目を閉じても開いても、金色に輝く仏像が蓮の花の上に座つておられるのを見るがよい。そ

れが出来ると心の目が開いて、極樂淨土の
「くらくじょうど」

こく しつぼうしょうごん ほうじほうち ほうじゅごうねつ しよてんほうまん み ふ ごじよう しゅぼうらもう まんこくじゆう けんによし じ こくりよう
国・七宝莊嚴・宝地宝池・宝樹行列・諸天宝幔・弥覆其上・衆宝羅網・滿虛空中・見如此事・極令
まんまく

七つの宝でできた大地や池や並木を見て、その上に宝の幔幕が覆い、大空には宝の網が覆われているのをはつきりと
見るであろう。自分の手の中にあるかのようにはつきりと見えるようにするのだ。これが終われば、蓮華を今度は

阿弥陀仏の左側に想い浮かべよ。前の蓮華と同じ形と大きさだ。そして今度は阿弥陀仏の
「あみだぶつ」

華・在仏右辺・想一觀世音菩薩像・坐左華座・亦放金光・如前無異・想一大勢至菩薩像・坐右華
「かんぜおんばさつ」

右側に蓮華を想い浮かべよ。左の蓮華の上には觀世音菩薩の像がお座りになり、阿弥陀仏と同じく金色の光を放つ

ているのを想い浮かべよ。右の蓮華の上には大勢至菩薩の像がお座りなるのを想い浮かべよ。
「だいせいしほさつ」
「あみだぶつ」
「こんじき」
座・此想成時・仏菩薩像・皆放光明・其光金色・照諸宝樹・一一樹下・復有三蓮華・諸蓮華上・各
「さしそうじようじ ぶつぼさつぞう かほうこうみよう ここうこんじき しょうしょほうじゅ いちいちじゆげ ぶうさんれんげ しょれんげじよう かく」

この観が出来ると、これらの像は光を放つ。その光は金色で、宝の樹々を照らす。それぞれの樹の下にはまた三つの蓮華があつて、その蓮華の上には仏像一体と

ぶつぞう

有一仏・二菩薩像・徧滿彼國・此想成時・行者當聞・水流光明・及諸宝樹・亮鷹鴛鴦・皆說妙法・
菩薩二体がお座りになり、極樂淨土に満ちている。この想が出来ると、極樂淨土のせせらぎや光、宝の樹や鴨や雁
や鴛鴦が仏法を説くのを聞くことが出来る。

出定入定・恒聞妙法・行者所聞・出定之時・憶持不捨・令與修多羅合・若不合者・名為妄想・若

かん

その観に入つたときから出るときまで、ずっと仏法が聞けるのだ。行者が聞いたことは、観が終わっても忘れないよう
にし、經典と照らし合わせてみよ。もし合わなければそれは妄想である。もし合えば、

有合者・名為鹿想・見極樂世界・是為像想・名第八觀・作是觀者・除無量億劫・生死之罪・於

かん

ほぼ極樂淨土を見たと言える。これを像想といい、第八の観と名付ける。この観ができれば、無量億劫の迷いの罪が
げんしんじゅう とくねんぶつさんまへ

現身中・得念佛三昧・

消え、この身のままで念佛三昧に入る事ができる。」

ねんぶつざんまい

阿弥陀仏の真のすがたを想う

あみだぶつ

正宗分 定善 真身觀

しょくしんせん

かん

正宗分 定善 真身觀

しょくしんせん

かん

・・・阿弥陀仏の真のすがたを想う

仏告阿難・及韋提希・此想成已・次當更觀・無量壽仏・身相光明・阿難當知・無量壽仏身・如百千

しゃか あなんそんじや いだいけぶにん

かん

あみだぶ

あみだぶ

を想い描くがよい。阿難よ、よく知つてなさい。阿彌陀仏の身体は百千万億の

まんのく やまてん えんぶ だんこんじき ぶっしんこう ろくじゅうまんのく なゆた ごうがしゃ ゆじゆん みけんびやくこう うせんえんでん によご

万億・夜摩天・閻浮檀金色・仏身高・六十万億・那由他・恒河沙由旬・眉間白毫・右旋婉轉・如五

やまてん なゆた ごうがしゃ ゆじゆん

びやくこう

ひぶつえんこう によひやくおく さんせん

夜摩天の黄金のように輝き、高さは六十万億那由他恒河沙由旬である。眉間の白毫は、右周りで、大きさは
須弥山・仏眼如四大海水・青白分明・身諸毛孔・演出光明・如須弥山・彼仏円光・如百億・三千

須弥山五つ分である。み仏の眼は四つの海のように広く、澄みきっている。身体の毛穴からは光が出て、須弥山のよ

うである。また、阿彌陀仏の頭の後ろにある円い光は、百億の三千大千世界の様である。

大千世界・於円光中・有百万億・那由他・恒河沙化仏・一一化仏・亦有衆多・無數化菩薩・以為

その光の中に百万億那由他恒河沙の我々に合わせて変化されたみ仏がおられ、さらにそれぞれに菩薩が付き

侍者・無量寿仏・有八万四千相・一一相・各有八万四千・隨形好・一一好・復有八万四千光明・

添われている。阿彌陀仏は八万四千のすぐれた所がある。それぞれに八万四千のすぐれた特徴があり、それぞれ

に八万四千の光が放たれている。

一一光明徧照・十方世界・念佛衆生・攝取不捨・其光明相好・及与化仏・不可具說・但當憶想・

ねんぶつ

ほどけ

しく説き述べることができない。ただ深く想い、

りょうしんげんけん けんしじしや そっけんじっぽう いっさいしょぶつ い けんしょぶつ こ みょうねんぶっさんまい さ せかんしや みょうかんいつさいぶっしん
令心眼見・見此事者・即見十方・一切諸仏・以見諸仏故・名念佛三昧・作是觀者・名觀一切仏身・

心の眼で見るので。これを見るものは、すべての仏がたを見るということだ。すべての仏がたを見るので、念佛三昧

と名付ける。この觀ができればすべてのみ仏の姿を観ると言える。

いからんぶつしんこ やっけんぶつしん ぶっしんしゃ たいじひ せ いむえんじ せつしょしゅじょう さ しかんしや しゃしんたせ しょうしょぶつ
以觀仏身故・亦見仏心・仏心者・大慈悲是・以無縁慈・攝諸衆生・作此觀者・捨身他世・生諸仏

み仏の姿が見えたのだからみ仏の心も見ることができる。み仏の心とは大慈悲心のことである。縁なきものも慈悲

の心ですくうだ。この觀ができれば、いのちが終わり、次の生では、仏がたの前に生まれ、

せん とくむしょうにん せ こちしゃ おうとうけしん たいかんむりょうじゅぶつ かんむりょうじゅぶっしや じゅいちせうこうにゅう たんかんみけんびやくこう
前・得無生忍・是故智者・应当繫心・諦觀無量壽仏・觀無量壽仏者・從一相好入・但觀眉間白毫・

阿弥陀仏のお徳を得ることができる。だから、智慧のあるものは、心を集中してはつきりと阿弥陀仏を想い描くの

だ。阿弥陀仏を想い描こうとする者は、一つの特徴から想い描くがよい。ただ眉間の白毫をはつきりと

びやくこう
くくりょうみうりょう けんみけんひやくこうしゃ はちまんしじんそうこう しねんとうげん けんむりょうじゅぶっしや そっけんじっぽう むりょうしょぶつ とっけん
極令明了・見眉間白毫者・八万四千相好・自然當現・見無量壽仏者・即見十方・無量諸仏・得見

想い浮かべよ。それができれば、八万四千の特徴が自然と現れるはずだ。こうして阿弥陀仏を想い描けたなら、20

べての仏がたも観る事ができたことになる。

無量諸仏故・諸仏現前授記・是為徧観・一切色身想・名第九觀・作此觀者・名為正觀・若他

阿弥陀仏を観る事ができたので、仏がたは目の前で行者が悟りを得ることを約束してくださる。これをすべての仏がたを想い描く想といい、第九觀と名付ける。この觀ができれば正觀であり、

觀者・名為邪觀・

もし他を観るならば邪觀である。」

キン二打

正宗分 散善 上上品…上品上生について

。仏告阿難・及韋提希・上品上生者・若有衆生・願生彼國者・發三種心・即便往生・何等為三・一者
お釈迦様は阿難尊者と韋提希夫人に仰せになりました。「上品上生とは、もし極樂淨土に生まれたいと願うものは、三種の心を起して往生をする。一つには至誠心、

しじょうしん にしゃじんしん さんじやえこうほがんしん ぐさんじんしゃ ひつしゅう ひこく ぶう さんじゅしゃじゅう どうとくおうじゅう がとういさん いっしゃ
至誠心・二者深心・二者廻向發願心・具三心者・必生彼國・復有三種衆生・當得往生・何等為三・

じんしん

えこうほつがんしん

べくらくじょうど

二つには深心、三つには回向發願心である。これらを具える者は必ず極樂淨土に生まれる。また、三種の行を修めるものは往生をすることができる。その三種とは、

一者慈心不殺・具諸戒行・二者誦誦大乘・方等經典・三者修行六念・迴向發願・願生彼國・具此

一つには慈しみの心でもやみに殺さず戒を守つて修行をする者、二つには大乘經典を称える者、三つには仏・法・僧・戒・施・天の六念の行を修める者である。この功德をもつて極樂淨土に生まれたいと願い、

功德・一日乃至七日・即得往生・生彼國時・此人精進勇猛故・阿弥陀如來・与觀世音・大勢至・

一日から七日の間この功德を積むのならば直ちに往生ができる。極樂淨土に生まれる時、この者が懸命に努力を

したので、阿弥陀仏は觀世音菩薩と大勢至菩薩、

無数化仏・百千比丘・声聞大衆・無数諸天・七寶宮殿・觀世音菩薩・執金剛台・与大勢至菩薩・至

数え切れない仏がた、百千の修行者や声聞達、数え切れない天人達が七つの宝で出来た宮殿と共にいでのになる。

觀世音菩薩は金剛の台をささげて、大勢至菩薩と共に

行者前・阿弥陀仏・放光明・照行者身・与諸菩薩・授手迎接・觀世音・大勢至・与無数菩薩・讚

あみだぶつ

ぼさつ

その者の前においでになる。阿弥陀仏は大いなる光を放ちその者の身を照らし、菩薩たちと共に手を差し伸べてお22

迎えになる。觀世音菩薩と大勢至菩薩は、数え切れない菩薩達と共にその者を讃え、

歎行者・勸進其心・行者見已・歡喜踊躍・自見其身・乘金剛台・隨從仏後・如彈指頃・往生彼國・

その心を励まされる。その者は来迎を見て躍り上がって喜び、自分を見ると金剛の台に乗り、み仏の後に続ikip、指

を弾く間に極樂淨土に往生する。すると、

しょうひこくい ケンブッシュキン シュウソウグソク ケンシヨボサツ シキソウグソク シウミヨウボウリン エンセツミヨウボウ もんにそくご むしょうぼう

阿弥陀仏の様々な特徴と菩薩たちの特徴を見る。光の宝の林が仏法を説き、聞き終わると阿弥陀仏のお徳を得、

忍・經須臾間・歷事諸仏・徧十方界・於諸仏前・次第授記・還到本国・得無量百千・陀羅尼門・

わざかな間に仏がたの世界を見てまわり、すべての世界を周り、諸仏から悟りを得ることを約束される。極樂

淨土に還つてくると、計り知れない善を行ふ道を得る。

是名上品上生者・

これを上品上生と名付ける。

じょうほんじょうしょう

正宗分 散善 下下品・下品下生について

げほんげしょう

仏告阿難・及韋提希・下品下生者・或有衆生・作不善業・五逆十惡・具諸不善・如此愚人・以惡業

しゃか あなんそんじや いだいけぶにん

げほんしうう

ごくやくじゆうあく

お釈迦様は阿難尊者と韋提希夫人に仰せられました。「下品下生」というのは、五逆十惡を行い、諸々の惡を犯し

げほんしうう

てある。このよだな愚かな者は、その報いで

故・應墮惡道・經歷多劫・受苦無窮・如此愚人・臨命終時・遇善知識・種種安慰・為說妙法・教令

悪い世界に墮ちる。計り知れない長い時間をかけて、極まりない苦しみを受ける。このよだな愚かな者が命を終え

ようとする時、善知識に遇い、いろいろと心安らぐ教えを聞き、み仏を念じることを教えられる。

ねんぶつしにんくひつふおうねんぶつせんぬごうごんにおやくふのうねんじやおうしょうむりようじゅぶつによせししんりょうしょうふぜつぐそく

念佛・此人苦逼・不違念佛・善友告言・汝若不能念者・應稱無量壽仏・如是至心・令声不絕・具足

しかし、その者は臨終の苦しみでみ仏を念じることができない。善知識は言われた。「そなたがもし、念じることが

できなければ、無量壽仏の名を称えなさい。】】こうして、その者が、心から声を続けて

じゅうねんしようなもあみだぶつしおうぶつみようこおねんねんじゅうじよはちじゅうおつこうしようじしさいみようじゅうしじんこんれんげ

十念・称南・無阿・弥陀仏・称仏名故・於念念中・除八十億劫・生死之罪・命終之時・見金蓮華・

なもあみだぶつじゆうにんせんによいちねんきようそくとくおうじようこくらくせかいおれんげちゅうまんじゅうにだいこうれんげほうかいかんぜ

南無阿弥陀仏と十回称えると、そのことにより、八十億劫の迷いの罪が消える。命が終わると、金の蓮華が

太陽のように輝き、その者の前に現れるのを見ると、すぐに極樂淨土に生まれることが出来る。蓮の花に包まれて、

十二大劫が経つと、花が開く。觀世音菩薩と

おん だいせいし いだいひおんじょう い こうせつ しょぼうじっそう じょめつざいほう もんにかんき おうじそくほ ぼだいしん
だいせいしほさつ だいじひ

音・大勢至・以大悲音声・為其廣說・諸法實相・除滅罪法・聞已歡喜・忘時即發・菩提之心・

大勢至菩薩は大慈悲の声でその者の為に、世界の見方と罪を除く教えを説かれる。その者はそれを聞き、喜び悟りを求める心を起こす。

是名下品下生者・是名下輩生想・名第十六觀・

これを下品下生の者という。これらを下品の往生の想といい、第十六觀と名付ける。」

得益分：利益を得る

せつせこじいだいけ よごひやくじによ もんぶつしょせつ おうじそっけん ごくらくせかい こうじょうしそう とっけんぶっしん ぎゅうにほ
じょうど しゃか

說是語時・韋提希・与五百侍女・聞仏所說・忘時即見・極樂世界・廣長之相・得見仏身・及二菩

お釈迦様がこのようにお説きになると、韋提希夫人は五百人の侍女と共にお釈迦様の教えを聞いて、すぐに極樂

淨土の広大な光景を見ることができました。阿彌陀仏や觀世音菩薩や大勢至菩薩も拝見することができます。

さつ しんじょうかんき たんみぞうう かくねんだいこ とくむじょうにん こひやくじによ ほつあのかくたら さんみやくさんばだいしん がんじょひ
じょうど しゃか

薩・心生歡喜・歎未曾有・廓然大悟・得無生忍・五百侍女・發阿耨多羅・三藐三菩提心・願生彼

心から喜び、これほどまでに尊いのものはないと言え、迷いが晴れて、阿彌陀仏のお徳を得ました。五百人の侍女も

この上ない悟りを求める心を起こして、極樂淨土に生まれたいと願いました。

國・世尊悉記・皆當往生・生彼國已・得諸仏現前三昧・無量諸天・發無上道心。

お釈迦様は悉く約束されました。皆往生し、極楽浄土に生まれ、諸仏が現れ成仏を予告されました。数え切れ
ない天人達もこの上ない悟りを求める心を起しました。

流通分・阿難尊者がこの教えの要は何かを問う

爾時阿難・即從座起・前白仏言世尊・當何名此經・此法之要・當云何受持・仏告阿難・此經名

その時阿難尊者は立ち上がり、お釈迦様の前に進み申し上げました。「お釈迦様、この教えは何と名付けましょうか。この教えの要はどのように保てばよいでしょうか。」お釈迦様は阿難尊者に仰せられました。「この教えは

觀・極樂國土・無量壽仏・觀世音菩薩・大勢至菩薩・亦名淨除業障・生諸仏前・汝當受持・無令

【極樂淨土と無量壽仏と觀世音菩薩と大勢至菩薩を觀ずる經】と名付け、また【これまでの罪を除き、仏がたの前に生まれる經】と名付ける。そなたはこの教えを保ち、忘れることがないように。

忘失・行此三昧者・現身得見・無量壽仏・及二大士・若善男子・善女人・但聞仏名・二菩薩名・除

このみ仏を觀る三昧を行う者は、この世で無量壽仏と觀世音菩薩と大勢至菩薩を拝見することができる。もし善
良な者達が、ただ無量壽仏の名と觀世音菩薩と大勢至菩薩の名を聞くだけでも、

無量劫・生死之罪・何況憶念・若念佛者・當知此人・是人中・分陀利華・觀世音菩薩・大勢至菩

26

計り知れない迷いの罪が除かれるのだから、念ずるならばなおさらである。もし念佛する者は、知るがよい。その者は、白く清らかな蓮華のような尊い人である。觀世音菩薩と大勢至菩薩は

かんせおんぼさつ だいせいしほさつ

ねんぶつ

薩・為其勝友・當坐道場・生諸仏家・仏告阿難・汝好持是語・持是語者・即是持無量壽仏名・仏說

勝れた友となり、悟りの場に座り、諸仏の家である極樂淨土に生まれる。」お釈迦様は阿難尊者に仰せられました。

しゃか あなんそんじや

ねんぶつ

「そなたはしつかりと心にとどめておくがよい。心にとどめるとは、阿彌陀仏がかららずすくうと南無阿彌陀仏の念佛として皆に届いていることを聞くのだ。今ここで、阿彌陀仏がはたらいおられると念佛を称えて聞くのだ。」

あみだぶつ なもあみだぶつ

ねんぶつ

此語時・尊者目犍連・阿難及韋提希等・聞仏所說・皆大歡喜。

お釈迦様が説かれた時、目連尊者や阿難尊者、韋提希夫人達はこれを聞き、皆大いに喜んだのです。

耆闍分・お釈迦様が耆闍崛山に帰り、教えを説く

爾時世尊・足歩虛空・還耆闍崛山・爾時阿難・広為大衆・説如上事・無量諸天・及竝夜叉・

その時、お釈迦様は空中を歩んで耆闍崛山にお帰りになられました。阿難尊者は大衆の為にお釈迦様の教えを説

き、計り知れない天人達や龍や夜叉も、

てんにん

やしゃ

しゃか

きしゃくっせん

あなんそんじや

しゃか

にじせそん そくぶ こく げんぎしゃくっせん にじあなん こうい だいしゅう せつによじようじ むりょうしょてん きゆうりゆうやしゃ

ねんぶつ

ねんぶつ

きしゃくっせん

聞仏所一説・皆大歡喜・礼仏而一退

教えを聞いて喜び、お釈迦様に礼拝して帰りました。

仏説観無量寿經 キン一打

○南無阿彌陀仏

●南無阿彌陀仏

南無阿彌陀仏

南無阿彌陀仏

南無阿彌陀仏

南無阿彌陀仏

南無阿彌陀仏

南

○願力成就の報土には

●自力の心行いたらねば

大小聖人みなながら

如來の弘誓に乗ずなり

○煩惱具足と信知して

●本願力に乗すれば

すなわち穢身すてはてて

ほんがんりき じょう

えしん

阿彌陀仏のすくいにおまかせするのです。

自分は弱い人間であると深く気づいて

阿彌陀仏のすくいにおまかせするのです。

煩惱がすぐ起ころる自分の力では行くことができません。

阿彌陀仏の本願力で完成した極楽浄土へは

様々な仏道を歩む素晴らしい方々もみな

あみだぶつ

ほんがんりき

じょう

阿彌陀仏のすくいにおまかせするのです。

さまでまな苦しみ悩みの身を捨てて

法性常樂証せしむ

苦から解放された本当の樂を味わえるのです

○願以此功德 ●平等施 一切同發菩提心 往生安樂國

どうかこの阿弥陀如來の功德によつて 平等に届く阿弥陀如來の御名を聞き 共にこれをよろこび 安樂（極樂）浄土に、往生させていただきましょう

キン三打 経本を頂く・合掌・礼拝

ごぶんしよう ほんがんじ
御文章 本願寺第八代目宗主蓮如上人（一四一五～一四九九）が記された手紙。二〇〇通を超える

聖人一流章

しょうにんいちりゅう

ごかんけ おもむき

聖人一流の御勸化の趣は、

しんじん

信心をもつて本とせられ候。

ぞうきよう

その故は、もろもろの雑行をな

理由は、自分の力には限界があることを知

しんらんしおにん
親鸞聖人が示された浄土真宗の教えで大切

じょうどしんしゅう

な所は、阿弥陀如來より賜る信心です。その

しんじん

げすてて、一心に弥陀に帰命すれば、不可思議の願力として、仏の方より往生は治定せしめたまう。その位を、一念发起・入正定之聚とも釈し、その上の称名念佛は、如來わが往生を定めたまひし、御恩報尽の念佛と心得べきなり。

らされ、さまざま修行を捨てて、阿弥陀仏のすくいにおまかせしますと心から思うならば、阿弥陀仏の力により、極樂淨土に生まることが決まります。その境地は、次の世に仏となることが定まる弥勒菩薩と同じです。今ここが、すくいのど真ん中です。その上で南無阿弥陀仏と称えることは、阿弥陀仏はよくぞこの私を見捨てることなく声をかけ続けて下さいましたと頂きました

浄土真宗のすくいのようこび

阿弥陀如来の本願は
あみだによらいほんがん

かならずすくうまかせよと
なもあみだぶつ

南無阿弥陀仏のみ名となり
わなし

たえず私によりかけます
わたし

このよび声を聞きひらき
ごえき

にょらい

如来のすくいにまかすとき
とはき

ともしび

永遠に消えない灯火が
わだし

こころ

私の心にともります
わたし

如来の大悲に生かされて
にょらいだいひい

ごおんほうしゃ

御恩報謝のよろこびに

なもあみだぶつとな
南無阿弥陀仏を称えつ

まことみちあゆ
真実の道を歩みます

この世の縁の尽きるとき
よえん

如來の淨土に生まれては
にふらいじょうとう

さどりの智慧をいただいて
ちえ

あらゆるいのちをすくいます

しゅうそしんらんしょうにん
宗祖親鸞聖人が

によらいまことしめ

如來の真実を示された

じょうどしんじゅう

淨土真宗のみ教えを

とも

ひろ
共によろこび広めます

かんむりようじゅきょう

観無量寿經とは

じょうどさんぶきょう

淨土三部經の一つで「觀經」とも言います。

古代インドのマガダ国の首都王舍城で阿闍

おうしゃじょう
あじや

世王子が父を殺し、母を軟禁するという事

件が起きました。今でいう家庭内暴力が起

きたのです。

母の韋提希夫人がお釈迦様にすくいを求

め、阿弥陀仏の極楽淨土に生まれたいと願

います。お釈迦様はその方法を説かれ、そ

れができるない者のために南無阿弥陀仏と念

仏を称える事を勧められます。

読み方などわからない場合は、YOUTUBE「西光寺チャンネル」を参考にして下さい。その他の勤行・節談説教・紙芝居・アニメも配信しています

読み方などわからない場合は、YOUTUBE「西光寺チャンネル」を参考にして下さい。その他の勤行・節談説教・紙芝居・アニメも配信しています

西光寺チャンネル

観無量寿經法事用

	
	

淨土真宗本願寺派西光寺

千葉県市原市根田七二三一

TEL ○四三六一二二一七四二一

✉ saikohji@saikohji.net



HP 「市原市 西光寺」で検索かQRで